The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜研究ノート＞バタイユ思想における女性像とクィア理論における人間存在の類似について（１）
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2016, 37, p. 163-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54587
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

バタイユ思想における女性像とクィア理論における人間存在の類似について（1）

宮澤 由歌

要旨

ジョルジュ・バタイユの著作に描かれる女性像は、ジェンダー論的批判を免れないものである。本稿では、このことを前提に、バタイユの女性像が客体として描かれる意義を検討した。また、その女性像のあり方が、近年のクィア理論における人間存在の視線の変容と近似する可能性を模索する。

キーワード

ジョルジュ・バタイユ／クィア理論／レオ・ベルサーニ／リー・エデルマン／共同体論

1. はじめに

本研究ノートで注目するのは、ジョルジュ・バタイユの思想に見られる女性像と、それが提示するものである。それらは、バタイユの理論的著作のなかで、主体的ではなく、また生産的ではない仕方で描かれる。バタイユの女性像は多くが単独での考察対象ではなく、他者との関係性において登場するため、この考察はバタイユにおける関係性の思想や共同体論を検討することになるだろう。

本稿では、このバタイユの女性像に見られる特徴が、近年のクィア理論およびその思想の潮流のなかでの人間存在を見る視線の変容と類似する可能性を模索する。その結果、バタイユの女性像はこれまで考えられてきた女性の特徴をもつだけではない独自の在り方を提示することをみていく。他方、クィアな存在や共同体はノーマティブなものと対立するそれだという以上に、独自の構造を持つという可能性が提示されるだろう。

クィア理論が、社会から性的に「変態」であると称される人々の社会的な生存闘争や、性にかんする規範的な主体概念の問い直しといった政治的問題に基礎づけられ発展した歴史は周知のとおりである。同時に、バタイユの思想も、これまでの先行研究によれば、当時の全体主義や共産主義を批判するものと捉えうる。当然、本検討は両者のそうした政治的視点を無視することはできない。このことを念頭に置きながらも、しかし、本検討は、両思想が提示する政治的問題を可視化し、彼らの政治的要請が拠る危機感のあらわれる思想を明らかにしたい。すなわち、本検討ではバタイユにおける女性の性質を明らかにし、そこに従来のジェンダー規範における特徴から逃れるものを見いだす。また、日本におけるクィア理論はまだ発展途上であり、本稿では国内外の研究のなかでも日本に紹介されている限りのものを取り扱うことで、日本におけるクィア理論の整理をいまいちど試みる目的も兼ねる。

2. 主体的でも生産的でもない存在―バタイユ思想における女性像

2.1 バタイユにおける３つの女性像

まず、バタイユの著作にみられる女性像を整理しよう。それは主に３つに分類することができる。（1）娼婦の容貌をまとった聖なる神としての女性。娼婦としての女性は、バタイユの小説のなかの登場人物としてとくに著される。これは、対象とみなされ主体的ではない描かれ方をしつつ、神性をもつものとしての特徴を表すだろう。つぎに、（2）全体的社会事象の経済的循環のなかで役割を担う女性。これは、人類学者モースやクロード・レヴィ＝ストロースが発表した経済活動の理論を参考に、社会を円滑に循環させる役割をもった存在として現れる。女性は妻として、子を再生産する者であると同時に富として過剰な価値を与えられる両義的な特徴を持つものである。さいごに、（3）共同体論から見えてくる女性像。この女性像は、主観をもった自己に対峙し、自己を変容させる存在として、共同体論のなかでやや形而上的な特性をもつ。これは、共同体が産出するものの無為性を担い、その無為的な産出を担う存在としての女性の特徴を表す。また、共同体において愛の情動を介することを不可欠とする。はじめに、それぞれの内実を整理していこう。

2.2 娼婦の容貌をまとった聖なる神としての女性

（1）娼婦の容貌をまとった聖なる神としての女性は、バタイユが著した小説的文章のなかに頻繁に現れる。たとえば、次の文章をみてみよう。

> マダム・エドワルダが「神」であるとわたしが言うとき、皮肉と受けとることは無意味である。だが、「神」が娼館の売春婦で狂者であるというのは、正気の沙汰ではない。やむを得ず、ひとがわたしの陰気さを嘲笑しようとも喜ばしく思うのだ。[1)]

バタイユの小説の代表作としてたびたび挙げられる『マダム・エドワルダ』（1941）の一節である。エドワルダは、主人公が娼館「鏡楼」で性交渉する娼婦である。主人公は、エドワルダとの性交渉に、味わうつもりでいた快楽とはちがった情動を得る。主人公は、エドワルダとの接触で「「神」の現前にたちあったひとのように」[2)]惨めな気持ちを経験する。

この「神」とはいったいどのような存在であろうか。『マダム・エドワルダ』はバタイユのペンネームであるピエール・アンジェリックが著者の作品であり、バタイユはバタイユ名義でその本の序文を寄稿した。そこで述べられるところに、娼婦の「神」性をみてとることができる。

> 叫びにおいて、自分自身の排他性のなかに沈み、自分自身を無に帰す、この悲壮な思考の果てで、私たちは神を見いだす。これが、この突飛な本の意味であり、甚大さである。[3)]

通常であれば快楽を予想させる性交渉は、その予想に反し、惨めで突き放されたような感覚を主人公に

感じさせる。それらは、小説のなかで「戦慄」、「生命を奪う死刑執行人」、「虚無」などと表現され、性的快楽とはとおく離れた感覚である。主人公は、「悲愴な省察」のなかで自らが求めた快楽とは違った情動に対峙する。このとき、それを誘う者は娼婦としての女性である。バタイユは、性交渉のなかで主人公とこれらの感覚をともにする娼婦に対し、不快なものを自ら求めてしまう主人公の無力さを描く。その娼婦たる女性は、主人公に、神の前に立つ感覚を抱かせる。ここでの女性は、主人公の働きかけに、主人公の思惑どおりではない仕方で応える、主体的ではないが神的な存在として描かれている。

> この物語は、その属性を存分に発揮させつつ、神それ自体を生じさせる。それにもかかわらず、この神は、あらゆる点で一般的な売春婦である。[4)]

バタイユにおけるひとつめの女性像が明らかになってきた。神性とエロティシズムを結びつける存在として娼婦が定置され、バタイユの女性像のひとつを組成している。この（1）娼婦の容貌をまとった聖なる神としての女性は、『マダム・エドワルダ』だけでなく、他の小説にも散見される。たとえば、『わが母』(1966)における女性の描写を見てみよう。『わが母』では、主人公は母親を聖女化して捉えており、母親は性に対して放蕩にふるまう。

> 母の怪物的な汚らわしさ―またそれにおとらず忌わしい、僕のけがらわしさ―は、天に向って叫んでいるように、そして完全な暗闇だけが光に似ているという意味で、それらは「神」に似ているように思えるのだった。ラ・ロシュフコーの直截な表現を僕は想い出すのだった。《太陽もまた死も直視できない》……僕の眼に死は太陽に劣らず神聖であり、母はその罪業のなかで、僕が「教会」の窓越しに眺めた何ものにもまして「神」に近づいていた。[5)]

ここでは、主人公が女性を神とみなす文章を取り上げたが、女性が自身を神だと自称する文章も、『マダム・エドワルダ』に存在している。このように、バタイユの女性像のひとつとして、娼婦の容貌をまとった聖なる神としての女性を認めることができる。女性は、女性の姿を保ちながら神性を感じさせる。本稿ではここまで、娼婦の神性をバタイユの表現にしたがって抽出してきたが、避けることのできない「神」はもうひとつある。言うまでもなく、キリスト教における神である。この「神」にかんする考察は、バタイユの女性の聖性を深く理解するのに役立つだろう。

吉田裕は、『マダム・エドワルダ』等における神性の表現に対する『死者』における神性について、「死を死者のもとに」[6)]のなかで次のように語っている。「『マダム・エドワルダ』は＜私は神なの＞と宣言する女の物語だったが、『死者』は、これから見るように、神の現れすら解体してしまう物語である」。吉田の言う「神の現れ」が、キリスト教の神を指すことに留意しよう。一方で、吉田は、『死者』の物語はキリスト教的神を解体する女性が描かれていると指摘している。吉田は、『死者』の内容を丁寧に解説しながら、この物語がキリスト教に向けられた批判を多く含んでいることを指摘する。全体をとおして「死」

を中心に据えた論考であるが、その考察のなかで、吉田は、バタイユがキリスト教の神を「解体」によって批判するのみならず、そこから一歩先に進んだバタイユ思想の神性について語っている。

バタイユの小説に多く登場する娼婦としての女性は、対面する主人公に未知の情動を与える聖性をもち、自他ともに「神」を称するが、その特徴はキリスト教の神のものとは異なることが明らかになった。具体的に述べるならば、エロティックな行為をつうじて他者（主人公）に神の前に立ったような印象を与える女性であり、かつ、キリスト教的神に近づこうとする男性を死に誘うことによって挫折させる役割を持つ者である。こうした存在をバタイユはキリスト教的神に対して聖性をもつ者とみなし、複数の物語に女性として登場させている。

この女性像は、人間としての規格をもはや裏切っているといえるだろう。ミシェル・シュリヤも、彼の主著『バタイユ伝』[7]のなかで、バタイユの小説に登場する女性について「「鈍く絶え間ない戦慄に身をよじる虫の節々にも似た」彼女の肉体、それが引き起こす心の動揺と激しい欲情（その誘惑と恐怖）からすれば、彼女の肉体はもはや娼婦のそれではなく、そもそも生き物の肉体かどうかもわからない（河出、pp.228-229）」と述べる。バタイユの小説における女性は、人間的な男性をそうでないものに立ち向かわせ、自らの方へ誘い、男性の「神に近づく人間たれ」という自認を揺るがせる。対象としてみなされるゆえに主体性が弱く、この状況において主人公である男性は、あたかも自滅していく存在のようである。この作用をもつ存在をバタイユは聖なる者とみなす。さらに、すでに確認してきたように、この聖者はキリスト教における神とは異なり、より広い宗教的様相をもっている。それは、キリスト教において主流な信仰とは別の、たとえばキリスト教神秘主義との関連を持ちうるかもしれない。バタイユの小説における女性像については、本稿ではこの段階で検討を終わりにし、より詳細なものとしてすでに参照した岩野卓司「至高性と分身―ジョルジュ・バタイユ『わが母』における神学と近親相姦」[8]を挙げるに留める。また、ミシェル・シュリヤの『バタイユ伝』は、神性を軸としてまとめたバタイユの伝記的書物であり、バタイユ思想と神性とのかかわりをより深く理解することができるものである。

2.3　全体的社会事象の経済的循環のなかで役割を担う女性

つぎに、経済論のテキストにおける女性像をみていく。理論的著作において女性は二通りの描かれ方をするが、そのひとつめが、全体的社会事象（faits sociaux totaux）の内部で、経済的・社会的な円環的活動を促進する役割をもつ存在である。全体的社会事象は、人類学者モースが提唱した概念であり、経済活動がそれとして独立するものではなく、生命や個人の生の充実等より広い円環的活動のなかに位置づけられるというものである。また、レヴィ＝ストロースはモースの研究を引き継ぎ、その経済活動に交換と贈与の原理を見出して提唱した。

人類学者らの思想とバタイユの思想との関連については、すでに拙稿「恋人たちの共同体にみるバタイユの共同体論」[9]にまとめた。したがって、人類学的知見を応用し、ある点で批判し発展させたバタイユの女性像については、これを参照されたい。本節では、当論文を基に、その女性像がどのような点で主体性や生産性とかかわるかを列挙する。

全体的社会事象として見られる共同体の男性は、内にもつ動物性を統制する規則として、近親婚の禁止を制定した。この禁止の法に対し、女性は大きな役割をもつ。それは、贈与されるものとして社会的／経済的円環活動を維持する役割である。相手が近親者であれば、男性は女性を贈与せず、そうでない他部族に対しては、女性は贈与される。

近親婚の禁止は、社会を円滑に循環させていくために生じた法であるが、贈与するかしないかを決定する能動的な役割を担うのは、部族や家族の長の男性である。ここでは、家父長制が横行し、しかも是認されている。一方で、バタイユにおいては女性に特別な価値が与えられていることにも目を向ける必要がある。この価値は美や贅沢といった消尽の特徴を持っており、非生産性とも関連している。

ただ、この女性像を総体的にみたとき、バタイユがモースらの贈与論を基にしている以上、贈与される富、あるいは子を産む身体を社会に対する役割が、女性の特徴の基盤になっているとみなされることは避けられないだろう。この女性は、その意味で男性／社会にとって生産性を提供する。さらに、この女性は、経済が循環する社会に対して受動的な仕方で参入しているということができる。もちろん、バタイユはこの交換–贈与的循環のなかに、エロティックな至高性を見出し、それをテキストで強調している。しかし、このテキストは結局のところ女性を物あるいは客体とみなし、受動的な立場におくことで、その主体性のなさを浮き彫りにしているものであるといえる。この女性像は、ジェンダー論の文脈において批判されてきた古典的なひとつの材料である。とはいえ、こうした女性の特徴、あるいは、女性がこのように捉えられてきた長い歴史について、批判的視点からのみでなく総合的に思索することが求められるだろう。バタイユに戻れば、一方で妻と対比させられる過度な装飾品を身にまとった女性の描写[10]からは、その非生産性が見いだせる。とはいえ、このテキストは、バタイユの思想の歴史から見て、バタイユが普遍経済論を提唱するのに役立つものである。その証左として、バタイユが社会的共同体のなかに至高性を見出す検討をおこなったとみなすこともできる。

2.4　共同体論から見えてくる女性像――ナンシーのバタイユ論から

わたしたちは、この節で、バタイユの理論的著作におけるもうひとつの女性像を検討する。そのためには、バタイユの共同体論を検討しなければならない。というのも、前節で論じられた女性像に加え、バタイユの理論的著作における女性は共同体のなかで現れるものが目立つからである。しかも、それは限定されている。バタイユが当時の異性愛主義の視点を踏襲していることを考えれば（もちろん、１－２でみた彼の小説に描かれる女性像を除く場合の話であるが)、「恋人たちの共同体」における愛を介するカップルの一片としてということになる。バタイユの恋人は後述するように、基本的には男性的主体と女性的客体をカップルとして捉える。

バタイユの共同体論を検討するにあたって、その土台にすべきだと考えられるのは、J-L. ナンシーの「無為の共同体」というテキストである。このテキストは、書かれた時代における政治的状況とそれによる要請に大きく影響を受けている。ナンシーはバタイユやハイデガーの死に注目しながら、当時の全体主義や共産主義への視線と一線を画するかたちで、共同体概念を脱構築し再考している。

したがって、ナンシーのテキストは純粋にバタイユの共同体論を検討したものではない。彼は本テキストでは、エクリチュールと共同体の関係性について、「無為の共同体」以後の論考にそれをつなげる目的をもって検討をすすめる。バタイユの共同体論の物足りなさを指摘する箇所も一部見られる。とはいえ、以上を考慮したとしても、「無為の共同体」はバタイユの共同体論をバタイユ本人以上に理論的に明示化しており、わたしたちが本節で整理する女性像を抽出するに役立つもっとも適したテキストだと考えられる。

ナンシー自身、当テキストでバタイユの「恋人たち」について触れているが、わたしたちは「恋人たちの共同体」を含む、より広いバタイユの共同体論へのナンシーの意識について参考にする必要があるだろう。それによれば、共同体は構成員が集まって営みを行う集団を指すのではない。それぞれの人間（これをナンシーは特異存在や内在と呼ぶ）にすでに分有されているものを露呈する場を、ナンシーは共同体と呼ぶ。

ところで、死は、共同体の場においてつねに「他人の死」として存在し、人間と死との関係性とは、せいぜい「他人の死」に立ち会う以上のものではない。「死」にまつわるこの意識は、ナンシーがハイデガーの思想に大きく影響を受けた箇所といえるだろう。そして、共同体での他人の死は、特異存在が有限な存在であることを露呈させる契機となる。したがって、人間存在自体は当然のことながら無限ではなく、他方死が無限、あるいは無とみなされる。有限者は共同体のなかで死を介し、他の特異存在と分離された存在であることを知る。

この死＝無の露呈による有限者の分割への意識は、共同体概念にかんする対比的証左となる。すなわち、共同体は有限な人間存在たちが営みによって作り上げていくものではなく、ただそこにあり無為であることを意味するのである。共同体は、その場上で死を露呈するのみで、生産的営みをおこなわないという意味で無為である。そして、主体は、しばしば考えられるように共同体に参入するのではなく、無限の死を有限者に露呈する共同体から出来し／構築され、他人の死に立ち会うことによって死の無–性を経験し、自身の有限性を知るというスキームが見えてくる。ここには、人間存在に対する共同体の優位性を感じとることができるだろう。また、主体とは別の人間存在のあり方を探る大きな可能性を感じざるをえない。[11)]

こうしたナンシーによる共同体概念の刷新は、バタイユの共同体論に大きく影響を受けている。ナンシーは、こうした共同体概念がいかにあるのかという問いをエクリチュールと関連させて検討を進めていくが、今回は本筋にしたがい、その検討を取り扱うことはしない。わたしたちは、バタイユの理論的著作における女性像のひとつについて、ナンシーによるバタイユの共同体解釈から、いくつかのことを抽出することを優先させよう。それは、ふたつの観点から見出すことができるだろう。ひとつめに、主体の問題であり、ふたつめには、愛という情動の問題である。この２つの軸で展開されるテキストがバタイユの「恋人たちの共同体」であり、この共同体論にバタイユの女性像が描かれているといえる。

ナンシーは、共同体について述べる文章のなかで、主体を引き合いに出し、次のように述べている。

> 至高性がおのれを露呈しわれわれを露呈する過剰とは、おそらくハイデガーの言う存在が「存在しない」というのに近い意味で、つまり有限な存在者の存在は彼をむしろこのような露呈[外-置]へと放棄されたものとして存在させているという意味で、存在していない。（…）しかし、至高性のその無

への露呈は、虚無の境界へと辿り着きもするだろう一個の主体の運動とは逆のものである。「無」の「中」では、あるいは何の中でもないところでは――至高性のなかでは――存在は、「自己の外」にある。[12)]

死＝無が露呈される場である共同体において、主体的存在とかんがえられる有限な存在者は、そのかたちのままではありえない。ナンシーは、これをバタイユの文章によって、バタイユが体験したものとして認め、次のように述べる。「その意味で間違いなくバタイユは、共同体の現代的体験、すなわち生み出すべき作品でもなく、失われた合一でもなく、外の、＜自己の外＞の体験の空間それ自体であり、その空間化にほかならないものとしての共同体を最初に体験した、あるいはそれを最も鋭敏に体験した人物なのである」[13)]。バタイユの「体験」は、『至高性』を読み込んだナンシーによって、上記のように理論づけられる。共同体において、有限な存在者は、主体的にはありえない。有限な存在者は自己の外へと投げだされ、それは脱我-恍惚と名づけられる状態にある。

また、バタイユ＝ナンシーが、主体それ自体について語らなかったわけではない。ナンシーは、バタイユが『内的体験』において結局のところ主体の至高性を追求しており、それによって共同体–コミュニケーションのパラドクスへと陥ってしまったことを指摘する。

「客体」そして「融合」とともに、あるいは「意識の客体」が「自己意識の客体、すなわち客体としては止揚された客体ないしは概念」となるとともに、他者もコミュニケーションも消滅する、というよりそうしたものがあったのでは他者もコミュニケーションも出現しようがないのである。[14)]

『内的体験』で深められたのは、主体が脱我–恍惚の至高な経験へと到達するその過程である。だが、主体が至高なコミュニケーションを経験するためには、客体が必要である。結局のところ、主体を基にした共同体の思想は、バタイユにおいてパラドックスを生みだし、挫折を余儀なくされる運命にある。共同体は、ナンシーが「主体ではない特異な実存たちの間で分有された至高性を思考することである。この特異な実存の関係—分有そのものなのだが—は合一でも対象[客体]の我有化でも自己認識でもなく、通常理解されるような主体間のコミュニケーションでさえない」[15)]というように、従来の主体間のコミュニケーションにかんする検討では辿りつくことができないものである。

本筋に戻ろう。わたしたちは、愛が因子となる「恋人たちの共同体」において、結局のところ、女性が客体に過ぎないという結論を出すことになるのだろうか。ナンシーは、恋人たちの共同体について次のように述べている。「バタイユの恋人たちもまた究極的には主体と客体である–主体はいつも男で客体はいつも女、これは性的差異を自己による自己の我有化へと流し込むおそらくはきわめて古典的な手立てによっている」[16)]。バタイユが女性を客体であると是認する箇所をおさえよう。『エロティシズム』には、次のような記述がある。

> 裸にされたかわいらしい娘は、しばしばエロティシズムのイメージになる。欲望の対象はエロティシズムとは違い、それはエロティシズムそのものではない。しかしエロティシズムは欲望の対象を通ってゆかねばならない。[17)]

これと同時に、バタイユは次のことを述べている。

> 原則的に、男は女の欲望の対象になりえ、女は男の欲望の対象になりうる。(…)だが、女は受身の態度で、男の欲望をかりたてて男との結合を得ようとし（…）女は、男の攻撃的な欲望に自身を提示するのだ。[18)]

ナンシーのいう「古典的な手立て」がここに見いだされる。ただし、主体に対する客体は、それがまったくの権力を持たないことを意味するのではないことに注目を促したい。合意された性行為においては、女は男に対して自分を提示するという受動的に主体的な行動に出るとバタイユは述べている。これは、ナンシーが指摘しなかったことであり、バタイユが女性の受動性についてネガティブな着目以外のものを見出している可能性が示唆されるといえるだろう。

さらに、ナンシーは上記で引用した「バタイユの恋人たちもまた究極的には主体と客体である–主体はいつも男で客体はいつも女、これは性的差異を自己による自己の我有化へと流し込むおそらくはきわめて古典的な手立てによっている」という文章のあと、付記をおこなっている。「しかし他のレベルで、他の読み方をすれば、愛と享楽がバタイユにおいて本質的に女のそれ――男における女のそれ――でないとは言いきれない」。この付記に、わたしたちは希望を見出すことができるだろう。バタイユの恋人たちが異性愛を前提とするならば、共同体において接触する客体たる女性は、同時に、特異存在としての地位をも持ちあわせるだろう。ここに性的差異は影響しないのである。

> そして客体は主体に、主体が存在の総体によって満たされると感じるために欠けているものを与える。ついにはそれ以上主体にとってなにも欠けなくなるような手法で。もちろん、それは、愛の分有を前提している。というのも、客体は、主体を愛することによってのみ完全に主体を補完することができるのだ。[19)]

『エロティシズム』の草稿として死後発刊された、『エロティシズムの歴史』における一節を引用した。この引用部に、主体の問題が書かれているのみであると惑わされてはならないだろう。確かに、主体が経験する様相について描かれてはいるものの、同時に、むしろ、わたしたちはナンシーの論考にそって見てきた共同体の様相を見いだすべきである。

すなわち、バタイユにおける女性像を検討するわたしたちにいえることは次のことである。バタイユの理論的著作における女性は、恋人たちの共同体が異性愛を前提としていることから、特異存在として、岩野のいう「主体なき主体」同士の接触の場に居合わせる。恋人たちの共同体がナンシーのいう共同体であ

る以上、場の空間化に必要とされるのは特異存在であり、主体なき主体であり、かつそれが複数で構成されなければならない。

この限りにおいて、バタイユの女性はこれまでのジェンダー論的批判に対するひとつの応答を差しだすことができる。すなわち、女性は、客体としての、ものとしての女性像に加えて、愛を介する恋人たちの共同体において、特異存在として、主体的でなく（あるいは、受動的に主体的であり）さらに何らかの生産物を残すものではない地位を与えられているということである。

2.5　まとめ

ここまで、バタイユの思想に見られる女性像をみっつにわたって整理してきた。３つの女性像は、書かれた時代も異なればその位相も異なるため、簡単に統一させることは難しい。それでも、これらは主体的でなく生産的でないという点において一貫している。また、女性の受動的な特徴が、すなわち客体としての価値のみを持つのではないことも明らかになった。次章では、本稿の結論として、バタイユの女性像とクィア理論における存在の類似性を明らかにするために、ふたりのクィア理論家を提示する。両者が類似するのは、死が消尽の形態を有し、死こそが共同体の重要な契機になることと、そうした共同体が露呈するものは究極的に非生産的なものであるということである。

3. 結論――バタイユ思想における女性像とクィア理論における人間存在の類似性の探求をめざして

3.1　クィア理論とその周辺、日本のクィア理論の発展について

クィア理論の領域では、クィアという概念と、その他の抽象的な概念とを結びつける研究が多くみられる。たとえば、クィアと空間[20]、クィアと時間[21]、クィアと規範的共同体などがある。こうした研究のなかで、クィアと諸概念は、相互に解明されていく。また、クィア理論に近い研究領域としてクィア批評があり、これはクィアとかかわりなく書かれた文学作品を、クィアの視点から読み込み、文学作品のなかに潜む規範性を浮き彫りにする。とはいえ、日本でのクィア研究は、これらを除いた社会学的検討が多くを占めており、批評や理論にかんする研究が興隆していると言いがたい状況にある。

そこで、本稿ではあえて日本における、あるいは日本のクィア理論に影響を与えてきたクィア理論を限定的に取りあつかい、考察をすすめる。これは、本検討が目指すバタイユ思想の女性像とクィアの存在の類似点を模索していくと同時に、現在の日本におけるクィア理論の発展と未開拓の境界を明らかにし、日本におけるこれまでのクィア理論研究を整理する役割を担う。

3.2　クィア理論におけるふたりの論客

本節では、「バタイユ思想における女性像とクィア理論における人間存在の類似について（２）」で展開される検討に先立ち、ふたりのクィア理論家を紹介したい。レオ・ベルサーニとリー・エデルマン、このふたりの思想家は、精神分析の領域における知見をそれぞれフロイトとラカンに依りつつ、新奇的な理論を展開する。

レオ・ベルサーニは、1931年に生まれ、現在はカリフォルニア大学バークレー校の名誉教授であるが、1980年前後からアメリカで社会問題化したエイズ・パニックに対し、ゲイの立場から理論を展開してきたクィア理論家である。彼の著作は、ゲイ・カップルの問題を扱うことが多い。ベルサーニの著作に特徴的な点として、こうした問題のなかで一貫して受動的な立場の男性に注目するということがある。ゲイ・セックスにおいて受動的な立場におかれる「ネコ（bottoms）」と呼ばれる存在があり、ベルサーニのなかで彼は女性になることに近似させられる（『親密性』における種づけの検討などを参照のこと）。だが、ゲイ・カップルが性的交流のなかで産出するものは生産的・個体的な生ではなく、むしろ個体の死である。ベルサーニにおける「女性」が、生産的子産みの可能性をもつことを意味するのに対し（そもそもベルサーニは女性の問題を深く取り扱わない）、ゲイ・カップルにおける「ネコ」は無益なものや、さらにいえば、個体に対しては害や死を与えるものしか産みださない。さらに、彼らの営みは個体を消尽する特徴を持つ。以上のことは、これまで、『フロイト的身体』[22]、『ホモセクシュアルとは』[23]、『親密性』[24]などの著作のなかで展開されてきた。

また、リー・エデルマンは『No Future』[25]で有名になったクィア理論家である。彼は、ベルサーニ以上に精神分析、とくにラカンの理論を用い、死の欲動にかんする検討をおこない、彼が「生産的未来主義」となぞす一般的な姿勢を批判する。生産的未来主義は、資本主義社会において、こどもは守られるべき存在であり、「大人がこどもを守る」という命題は無条件に肯定され、疑われることのない強大な倫理として働くことと関連するとされる。エデルマンは、こどもを大文字で記す（「Child」）ことからも、こどもそれ自体を否定しているわけではないことにわたしたちは注目することができる。彼は資本主義的経済活動に利用される未来志向を批判するのである。わたしたちは、資本主義社会における最小の共同体の形態とみなされる家族が、こどもを産出することの意義を（こどもと未来の存在意義を含めて）検討することができるだろう。

次稿では、上記のクィア理論家らの思想を検討し、バタイユにおける女性像とクィア的存在を結びつける特徴として、主体的ではないこと、権力の放棄、交流からうまれる存在であることなどを立証していく。それらの特徴は、総合的に表すならば受動性ということができ、受動性の哲学的考察の領域を開くことを、次稿の目的とすることになるだろう。

たとえば、酒井健が指摘した、バタイユにおけるふたつの「力」の問題がある。[26]バタイユが用いる「力」は、forceとpuissanceのふたつに分類される（酒井は「力」の検討で、ヘーゲルの自然概念考察とニーチェの権力概念考察との関連性を扱っている）。『ニーチェについて』は、puissanceに対するforceの抵抗が市民革命を起こしたというニーチェの権力についての検討に、forceの有用性を認め批判するものである。バタイユ的forceの特性と、主体の受動性の重視との関連を検討していくことが、今後の受動性の哲学的考察の課題のひとつとして挙げられるだろう。

注

1）Bataille. Georges, *Œuvres completes* vol. Ⅲ , p.26, Gallimard, 1971. なお、バタイユの文章については邦訳を参照しつつ引用した。

2）同上、p.20

3）同上、p.12

4）同上、p.12

5）二見、p.97

6）『『死者』とその周辺』、2014、ジョルジュ・バタイユ、吉田裕訳、書肆山田所収。

7）Surya. Michel, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*. Gallimard, 2012.

8）『セクシュアリティ』、2012、水声社所収。

9）宮澤由歌、『年報人間科学』、第 35 号、pp.89-104、2014。

10）Bataille. Georges, *Œuvres completes* vol. Ⅷ , pp.119-128, Gallimard, 1971.

11）以上、ナンシーの思想については「無為の共同体」のテキストを参照のこと。

12）ジャン＝リュック・ナンシー、西谷修、安原伸一郎訳、『無為の共同体』、p.34、以文社。

13）同上、p.35。

14）同上、p.43。

15）同上、p.42。

16）同上、p.45。

17）Bataille. Georges, *Œuvres completes* vol. Ⅹ , p.130, Gallimard, 1987.

18）同上。

19）Bataille. Georges, *Œuvres completes* vol. Ⅷ , p.139, Gallimard, 1976.

20）クィアと空間については、たとえば、清水晶子「ようこそ、ゲイ・フレンドリーな街へ」（2015、青土社、「現代思想」、vol.43-16、pp.144-155）を参照のこと。

21）クィアと時間について有名な書として、J.Jack Halberstam, *In a Queer Time and Place*.（2005）がある。本書は邦訳されていないが、ハルバースタム氏は 2010 年に来日講演をおこなっており、今後日本での邦訳が期待される。

22）Bersani. Leo, *The Freudian Body: Psychoanalysis and Art*, Columbia University Press, 1986.

23）Bersani. Leo, *Homos*, Harvard Univ. Press, 1990.

24）Bersani. Leo (with Adam Phillips), *Intimacies*, Univ.Chicago Press, 2008.

25）Edelman. Lee, *No Future: Queer Theory and the Death Drive*, Duke Univ. press, 2004.

26）酒井健、『バタイユ―そのパトスとタナトス』、現代思潮新社、1996 を参照のこと。

The Woman Figures in the Thought of Georges Bataille.

Yuka MIYAZAWA

Abstract:

In the articles of Georges Bataile, The figures of woman were portrayed in objective expressions. In this thesis, based on the premise of that, we study the sense or purpose of the figures of woman in the thought of Bataille. And we also seek that the possibility of the proximity of the characters of these figures and the view of the human existence by queer theory.

Key Words : Georges Bataille, Queer Theory, Leo Bersani, Lee Edelman, The theory of Community